

## ヨハネ 15:17-16:4 「弟子たちのこの世との関係」

15:17 あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです。 15:18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。 15:19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。 15:20 しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。 15:21 しかし彼らは、わたしの名のゆえに、あなたがたに対してそれらのことをみな行います。それは彼らがわたしを遣わした方を知らないからです。 15:22 もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。しかし今では、その罪について弁解の余地はありません。 15:23 わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいるのです。 15:24 もしわたしが、ほかのだれも行っただけのことのないわざを、彼らの間で行わなかったのなら、彼らには罪がなかったでしょう。しかし今、彼らはわたしをも、わたしの父をも見て、そのうえで憎んだのです。 15:25 これは、『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』と彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。 15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかします。 15:27 あなたがたもあかしますのです。初めからわたしといっしょにいたからです。 16:1 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがまずくことのないためです。 16:2 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来ます。 16:3 彼らがこういうことを行うのは、父をもわたしをも知らないからです。 16:4 しかし、わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、その時が来れば、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。わたしが初めからこれらのことをあなたがたに話さなかったのは、わたしがあなたがたといっしょにいたからです。

### 導入

先週、ヨハネ 15:1-17 を学びました。その中で、実を結ぶぶどうの木につながっていることの大切さを教わりました。私たちはイエスにつながっていないと実を結ぶことができません。イエスが私たちひとりひとりとつながり、私たちの人生に本当の意味でおられなければ、霊の実を結ぶことはできません。

神の一番の目標は、神に属する人々が神の栄光のために実を結ぶことだとも学びました。

イエスにとどまるなら、私たちは実を結びます。

愛をもって神のみことばに従うなら、神は私たちの中に生きてくださいます。

ヨハネがここで語っている実とは、イエスのためにたましいを勝ち取り、そのたましいが実を結ぶぶどうの木につながることで学びました。イエスは弟子たちを「弟子を作る」働きのために備えてくださいます。

今日の教会が抱える問題のひとつは、「弟子を作る」弟子が育っていないことです。

どういうことかと言うと、ある人が新生して本物のクリスチャンになると、その人がクリスチャンとして成長し、成熟するために、そばに寄り添って教えてくれる人が必要です。その人が成熟して備えられたら、今度はその人がまた新しい信徒に寄り添い、教え、訓練するわけです。

その人たちが弟子を育てる役割をして初めて、その人はいつまでも残る実を結んでいると言えます。これは、どの教会にも共通する大きな課題です。これが弟子化の働きです。

これは大きな課題ですが、同時に、神にささげた人生を用いて神がすばらしいことをなして下さることを思うと楽しみになります。

では、先ほど読んだ個所の学びを始めましょう。(ヨハネ 15:17-16:4)

この個所はおもに、弟子たちのこの世との関係について語ります。

先週の個所は、弟子たちのイエスとの関係についてでした。今度は、弟子たちのこの世との関係についてです。

この世は、イエスの弟子たちを憎みます。そのおもな理由が先ほどの個所の中で4つ示されています。

その4つの理由を取り上げる前に、まずイエスがどういう意図で「この世」ということばをお使いになったか明らかにしておく必要があります。

この言葉は、聖書の中で少なくとも3つのことを指します。「造られた世」(ヨハネ 1:10)を指す場合もありますし、人類の世界を意味する場合もあります。(ヨハネ 3:16)

3つめは、今日の個所でイエスがおっしゃっている内容ですが、神から離れた世間を指します。

クリスチャンの視点からこの世とは、神を抜きにした世間の人や計画、団体、活動、哲学、価値観など全般です。

また、イスラム教、仏教、神道などの宗教も指します。

クリスチャンの名を語りながら、聖書の真理に従わない宗教も含まれます。そのような宗教は世界中に数多くあります。

こういった世的なものは、文化の一部であったり、不道德なことであったりします。

しかし、すべては罪深い人間の心と思いから生じたことです。

サタンは、この世の神、この世の君と表現されます。この世はそれとは知らずにサタンを崇拝しています。

(コリント第二 4:4、ヨハネ 12:31、14:30、16:11)

私たちクリスチャンは、この世を愛さないように注意しなければなりません。

ヨハネ第一 2:15-17

2:15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。 2:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。 2:17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。

パウロはローマ 12:1-2 で、「この世と調子を合わせてはいけません」と教えます。

悪魔は教会をこの世に引きずり降ろそうと巧みに働きかけます。クリスチャンが聖書の教えを妥協するよう仕向けてそうするのです。

今日の聖書個所で、なぜ「この世」が最初の弟子たちを憎んだのか、また歴史上のイエスの弟子たちをすべて憎むのかについてイエスが解き明かされます。

今日の聖書箇所がなぜ 17 節から始まっているのか不思議に思った方もおられるでしょうか。その理由は、イエスがここで互いに愛し合いなさいと繰り返されたからです。これは、弟子たちが憎まれる日が来るといふ悪い知らせを伝える前であったからだと考えられます。

弟子たちは、この世のどこかで彼らを愛する人がいることを知る必要がありました。それは、イエスの弟子たちによる愛です。こういう理由で、私たちクリスチャンが神のみことばの真理に沿って、心から互いに愛し合い、支え合うことが大切なのです。

コリント第一 13:4-8a

13:4 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。 13:5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、 13:6 不正を喜ばずに真理を喜びます。 13:7 すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。 13:8 愛は決して絶えることはありません。

では、なぜこの世が私たちクリスチャンを憎むのか、みことばから学んでいきましょう。

### 1. 弟子たちはイエスとひとつなので、この世から憎まれる。(18 節)

18 節で、イエスはまずご自身がこの世から憎まれたことを明らかにされます。イエスは弟子たちに、これから起こることについて警告されます。そして、彼らの身に降りかかるすべてのことをイエスもすでに経験されたと言って、弟子たちを勇気づけられます。

罪のない完全な神の御子が天の栄光を離れ、罪深い病んだ世の中に来てくださいました。それは、十字架で惨たらしい死を遂げ、来たるべき神の御怒りから人々を救うためです。そのお方が、まさに救いに来られた人々から憎まれたというのは、なんとも考えさせられます。

ヨハネ 1:11 は語ります。「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」

神である人は、病人を癒し、悪霊を追い出し、死人をよみがえらせ、親切の限りを人々に尽くしました。その報いが、この世からの憎悪です。信じられない話ですが、これが真実です。

私たちがイエスとひとつであるのなら、私たちもこの世から憎まれるでしょう。

ヨハネ第一 3:13 で、ヨハネはイエスの言葉を繰り返します。「兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。」

近年の同性愛者の権利擁護の動きは、クリスチャンがこの世に憎まれる現代の姿です。50 年前には、同性愛はよくないことと考えられていました。当時、神の目だけでなく、この世の視点からもそれは間違っているとみなされ、同性愛を犯罪とする国も多くありました。

しかし今では、世間は道德規準を下げ、同性愛を受容するだけでなく、同性婚も法的に認めるようになりました。性的指向について神の真理に賛同する信徒をこの世はすべて憎みます。

同性婚を認める教会はこの世に愛されますが、同性婚に対して聖書に基づいた立場を守る教会は憎まれます。同性愛者のみならず、世間一般から憎まれるのです。

ここで使われた「憎まれる」という単語には、非常に強い意味合いがあります。ひどく嫌い、憎悪で迫害することを指します。変わる事のない継続した憎しみです。

イエスは現実的なお方でした。ですから前もって弟子たちにどういうことが待ち受けているかお話になりました。

あなたもイエスについていこうとすれば、いくつもの課題にぶち当たります。まず、イエスと同じ扱いを受けます。

0. 弟子たちはこの世に属さないのです、この世から憎まれる。(19 節)

この世に愛はありますが、それは自己中心的な愛です。ですから、この世の人々のみを愛します。

しかし、クリスチャンはこの世から救い出されたイエスはおっしゃいます。クリスチャンは、この世から分かれた者です。もうこの世には属しません。クリスチャンの国籍はこの世にはなく、天にあります。(ピリピ 3:20)

私たちの肉体はこの世にありますが、この世に属してはいません。

ヘブル 3:1 には、私たちが天の召しにあずかっていると語ります。ですから、天の視点からこの世を見るべきです。

イエスとともに過ごせば過ごすほど、この世の物事への執着がなくなります。

この世は、協調を土台に機能します。世間のファッションや道徳観に迎合し、世間の価値観を受け入れるなら、波風は立ちません。

しかし、クリスチャンがローマ 12:2 の教えに従うと、問題が生じます。

信徒は「新しく造られた者」だと聖書は教えます。(コリント第二 5:17)

ですから、「古い生き方」で生きたいとは思わなくなるはずですよ。(ペテロ第一 4:1-4)

私たちは世の光、地の塩です。(マタイ 5:13-16)

しかし、暗闇の世は光を望みません。腐敗した世は塩を求めません。

信徒はこの世に属さないのです。

0. この世が霊的に盲目なので、弟子たちはこの世に憎まれる。(21 節)

イエスは21節で、この世は神を拒んだので霊的に盲目だとおっしゃいます。エルサレムにいた当時の宗教指導者たちに、神を知っているかと尋ねたなら、彼らは「私たちは神を知っている」と答えたでしょう。

しかし、イエスは 16:3 で、彼らは神を知らないとおっしゃいました。

宗教指導者たちは神についての知識があり、聖書のみことばを引用することはできましたが、神との個人的なつながりはありませんでした。

神を個人的に知るには、イエスを個人的に知る必要があります。

これは、イエスが初めて語られた内容ではありません。これについては、ヨハネ 8:19 と 8:55 ですでおっしゃっています。

ヨハネ 8:19

すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいますか。」イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしをも、わたしの父をも知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたでしょう。」

ヨハネ 8:55

けれどもあなたがたはこの方を知ってはいません。しかし、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしはあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っており、そのみことばを守っています。

現代の宗教の数々も、神を知っていると主張しますが、イエス・キリストにひざをかがめ、このお方が世の唯一の救い主であると認めようとはしません。

聖書は、サタンが人々の思いをくらませ、人々の罪がその心におおいをかけたと言います。

コリント第二 4:3-4

4:3 それでもなお私たちの福音におおいが掛かっているとしたら、それは、滅びる人々の場合に、おおいが掛かっているのです。4:4 その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。

エペソ 4:17-19

4:17 そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。4:18 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。4:19 道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行いをむさぼるようになっていきます。

タルソのサウロは、新約聖書の大部分の書簡を記した人物ですが、ユダヤ教の宗教が正しく完璧であると信じて疑わず、神の民を迫害しました。(使徒 7:57-8:3、22:3-4、26:9-12)

神が彼の霊の目を開いてくださり、やっとイエスについての真理が見えるようになりました。

0. この世は自らの罪を正直に認めないので、弟子たちはこの世から憎まれる。(22-24 節)

イエスはここで、ご自身がこの世に来たのは、神と罪についての真理を教えるためだとおっしゃいます。イエスはご自身が神の御子であることを証明するために多くの奇跡を行われましたが、人々はイエスを受け入れませんでした。なぜでしょう。それは、人々が自分の罪と向き合おうとしなかったからです。神に対して自らの罪を認めるには、勇気と素直さが必要です。人は皆、それぞれ勝手な基準で自分を判断します。しかし、神の基準は 100%の聖さです。この基準に達することは誰にもできません。

人々に自らの罪を弁明する余地はありませんでした。イエスの業を見、イエスのことばを聞いたのですから。

最後に、イエスの励ましのことばです。(15:25-16:4)

ここである疑問が生じます。信徒たちがこの世から憎まれ、敵意を感じているときに、聖霊がどうやって信徒たちを励ましてくださるのでしょうか。

おもに、神のみことばをとおしてです。そういうわけで、イエスは 25 節で聖書を引用なさいました。ここでイエスは、詩篇 35:19 と詩篇 69:4 を引用なさいました。この世がイエスを憎むのは、そのような敵対心を煽るような行動をイエスがしたからではないという慰めを、イエスは神のみことばから得られました。

私たちも、この世に憎まれるとき、みことばに目を向けて励ましを得ることができます。

ピリピ 1:27-30

1:27 ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活なさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会う

にしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、1:28 また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。1:29 あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。1:30 あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。

テモテ第二 2:8-13

2:8 私の福音に言うとおりに、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。2:9 私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。2:10 ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです。2:11 次のことばは信頼すべきことばです。「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。2:12 もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。2:13 私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」

イエスは、この世が私たちを憎むときは、証をする大きなチャンスであり、ときにはリバイバルのチャンスでもあると教えてください。26-27 節には、聖霊が私たちをとおしてイエスのことを証してくださるとあります。私たちは、無防備な状態でこの世に放っておかれたわけではありません。

使徒の働きを読めば、この世から憎まれた初代教会時代の信徒たちがどれほど聖霊に助けられたかがわかります。私たちも、うちなる聖霊のお働きが必要です。聖霊のお働きによって、私たちを憎むこの世に対して、イエスを証することができるからです。

最後に、16:1-4 です。

2 節にある「奉仕」という単語は、祭司の奉仕を指します。イエスは弟子たちに来たるべき日について警告なさいました。人々が彼らを殺して、自分たちは祭司として神に仕えていると自負する日が来るとおっしゃいます。

これは、タルソのサウロのことでしょうか。彼は、教会を滅ぼすことで神に仕えていると思っていました。(使徒 7:57-8:3、22:3-4、26:9-12)

この世から憎まれて私たちがつまずいてしまうことを、イエスは望まれません。

イエスはすでにこの世に打ち勝ったという事実にご勇気をいただきましょう。私たちも世に打ち勝てるよう、聖霊が助けてください。